

## 短期海外研修が大学生の意識に及ぼす影響に関する調査 —外国語力と異文化間コミュニケーションの意識を中心に—

李 穎 清

### 【要旨】

グローバル人材には、豊かな言語力と異文化間コミュニケーション能力が不可欠である。国際交流学科は、実践的語学力と国際交流のための知識とコミュニケーション能力を身につけた人材を育成することを教育目的とし、教育の一環として海外での研修やインターンシップを積極的に行っている。こうした中、海外研修は入学して間もない大学生に外国語力、異文化間コミュニケーション能力の重要性を意識づけるのにどのような効果をもたらしているのだろうか。それを検討するため、2013年9月のUCR研修に参加した1年生20名を対象に、研修前後にアンケート調査を実施した。調査の結果、研修を通じて、異文化理解を深めた上、日本語と日本文化を再認識することができたこと、自分自身の英語力が不足していることを認識し勉学意欲を高めたこと、異文化交流の重要性が分かったことが明らかになった。これらの結果から、海外研修に外国語力の向上、異文化間コミュニケーション能力の重要性を意識させる効果があることが分かった。

キーワード：海外研修 異文化 コミュニケーション 外国語力 意識

### 1. はじめに

2013年9月、国際交流学科ではアメリカのカリフォルニア大学リバーサイド校 (University of California, Riverside : UCR) で国際交流研修を実施した。この研修は、4月に入学した1年生を中心に、研修先のUCRの大学生との交流、ホームステイ体験、カリフォルニア州の観光資源や日系アメリカ人博物館などの見学、小学校・高校の生徒たちとの交流活動などを行い、南カリフォルニアの歴史と社会、アメリカ人の生活に対する理解を深め、異なる文化を持つ人々との世代を越えた異文化交流を体験することを主たる目的としていた。また、本研修に参加することによって、国際的な視野を身に付け、海外での滞在にも自信をつけ、更に長期の海外留学へのモチベーションを高めることも大きな目的の一つであった。

グローバル人材には、豊かな言語力と異文化間コミュニケーション能力が不可欠である。国際交流学科は、実践的語学力と国際交流のための知識とコミュニケーション能力を身につ

けた人材を育成することを教育目的とし、教育の一環として海外での研修やインターンシップ、本学の留学制度による留学生の派遣と受け入れを積極的に行っている。海外研修プログラムは、異文化理解を深めること、英語コミュニケーション力を向上させること、英語学習への意欲や長期留学、また将来英語を使った仕事へ就くことへの関心を高めることにより、世界で活躍する人材育成への意識付けとして大いに期待できる。そこで、海外研修が、入学して間もない大学生に外国語力の向上、異文化間コミュニケーション能力の重要性の意識づけにどのような効果を与えているのかを明らかにするため、2013年度のUCR研修に参加した20名の学生を対象に、研修前後にアンケート調査を実施した。本稿は、研修前と研修後の調査結果を分析し、海外研修が大学生の外国語学習、異文化間コミュニケーションの意識づけに与えている効果を考察すると共に、今後の研修カリキュラム内容の検討に資することを目的とする。

## 2. 本研修の内容

本研修は2013年9月4日から15日までの12日間実施された。研修のスケジュールと内容は表1で示す。

表1 平成25年度UCR研修内容

月日	午 前	午 後
9/4 (水)		成田空港発、ロサンゼルス着、UCR到着後、ホームステイ先へ移動
9/5 (木)	オリエンテーション UCRの学生とのワークショップ① “Living in America: Japanese Perspective” “Living in Japan: American Perspective”	Welcome Lunch、キャンパスツアー、交流活動の準備
9/6 (金)	郊外研修 (パームスプリングス・エリアル・トラムウェイ)	
9/7 (土)	ホームステイファミリーと過ごす	
9/8 (日)	“The Orange Coast”カリフォルニア発祥の歴史を英語で学ぶ (ミッション・サン・ホアン・キャピストラノ)	太平洋に広がる観光資源を見学 (ニューポート、ハンティントン他)
9/9 (月)	日系移民の社会と歴史を学ぶ (Japanese American National Museum、リトルトーキョー)	ロサンゼルスの多民族社会、現代社会を学ぶ (オルベラ街、チャイナタウン、ビバリーヒルズ、ロデオドライブ、ハリウッド他)
9/10 (火)	国際交流活動①日本語を教える体験、日本文化紹介 (Martin Luther King High School)	UCRの学生とのワークショップ② “Language of Love”

月日	午 前	午 後
9/11 (水)	国際交流活動②日本語の手話を教え、英語の手話を学ぶ (カリフォルニア州立聾啞学校)	リバーサイドの歴史的建築について学習 (Mission Inn 他) 国際交流活動の準備
9/12 (木)	国際交流活動③ひらがな、日本文化紹介 (Indian Hill 小学校)	UCR の学生との交流
9/13 (金)	カリフォルニアの風土と産業を柑橘類の栽培の歴史から学ぶ (California Citrus State Historic Park)	Tyler Mall で昼食 研修発表会 修了証書授与式
9/14 (土)	UCR 出発 ロサンゼルス空港到着	ロサンゼルス出発
9/15 (日)		成田空港着

講義においては、UCR の学生と一緒に、カリフォルニアの教育、多民族社会、言語をテーマに英語で学び、ディスカッションを行った。日米交流の歴史については、全米日系人博物館において、日系人がカリフォルニアの歴史の中でどのように関わりを持ったかを学習した。交流活動では、地元の小学校や高等学校を訪問し、現地の子どもたちに日本語や折り紙、習字といった日本の文化を英語で教えた。

### 3. アンケート調査の方法と内容

調査の対象は本研修に参加した交流学科 1 年生 20 名で、男性 12 名、女性 8 名であった。年齢は 18～24 歳、平均年齢は 18.65 歳であった。

調査は自記式質問紙を用い、研修前と研修後に行った。研修前後の共通の質問は、①年齢；②性別；③これまでの外国人との交流について、その人数；④英検・TOEIC など外国語検定を受験、取得した経験；⑤外国語教室に通った経験；⑥海外に旅行に行ったり在住したりした経験であった。研修前後で異なる質問は以下に記す。

#### 研修前：

- ①海外研修 (アメリカ UCR) で、あなたはどのようなことを学びたいと思っていますか。
- ②このたびの研修で日本語・日本文化を教えることについて
  - a. 研修で日本語・日本文化を教えることについてどう思いますか？
  - b. 研修で日本語・日本文化を教えることにどのようなことを期待していますか？
  - c. 難しい日本語・日本文化には、どんなものがありますか？
- ③アメリカ文化と日本文化、又は、アメリカ人と日本人はどのようなところが違うと思いますか？

## 研修後：

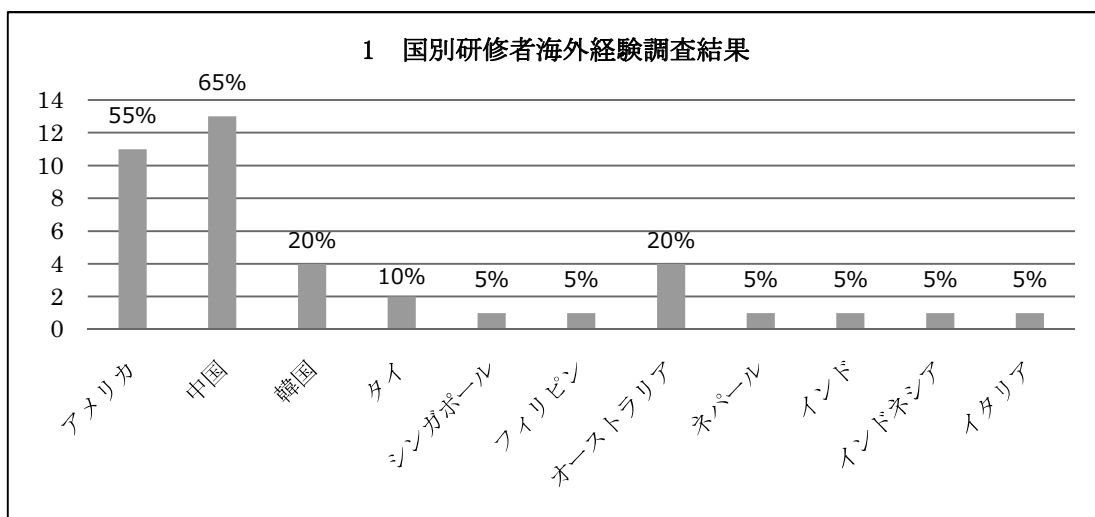
- ①海外研修（アメリカ UCR）で、あなたはどのようなことを学んだと思っていますか。
- ②このたびの研修で日本語・日本文化を教えたことについて
  - a. 研修で日本語を教えたことについてどう思いましたか？
  - b. 研修で日本文化を教えたことについてどう思いましたか？
  - c. 研修で日本語を教えた時に楽しかったことはどのようなことですか？
  - d. 研修で日本文化を教えた時に楽しかったことはどのようなことですか？
  - e. 研修で日本語を教えた時に大変だったことはどのようなことですか？
  - f. 研修で日本文化を教えた時に大変だったことはどのようなことですか？
- ③アメリカ文化と日本文化、又は、アメリカ人と日本人はどのようなところが違うと思いますか？

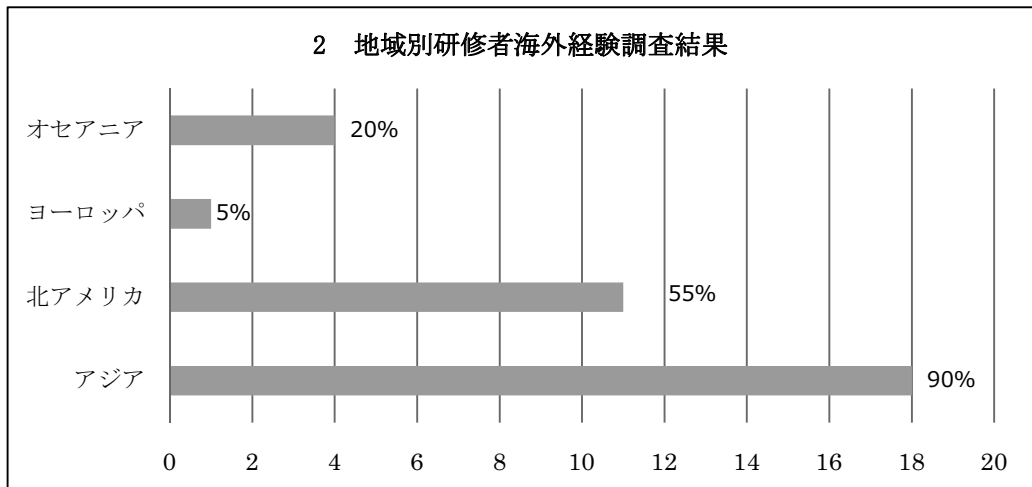
## 4. 調査結果

調査結果については、調査質問用紙の質問順にデータを集計し、分析していく。

### 4.1 対象者の海外経験と外国人との交流経験

今回の研修では、初めて海外に行く被験者は1名（5%）であった。一方、複数の国に行った経験のある被験者は少なくなかった。研修者の海外経験は**グラフ1（国別）**と**グラフ2（地域別）**の通りである。海外滞在経験者数は、国別で見ると、中国が（香港を含む）13名で、全体の65%を占め最も多かった。それに次いでアメリカは（ハワイとグアムを含む）11名（55%）となっていた。地域別で見ると、アジアは18名（90%）で、それから、北アメリカは11名（55%）であった。





海外滞在期間は、1週間以内の滞在経験者は5名（25%）、1週間以上2週間以内の滞在経験者は10名（50%）、2週間以上の滞在経験者は4名（20%）であった。

外国人との交流については、全員が外国人の教員に習った経験があり、外国人の友人がいて、友人数が2～100人、平均友人数が19.85人であり、外国人の親戚がいる学生は4名（20%）であった。

外国語検定の受験経験者に関しては、英検の受験者は7名（35%）、そのうち3級2名（10%）、準2級3名（15%）、2級2名（10%）であり、TOEICの受験者は18名（90%）、点数は220～545、平均点数は368.7であった。

以上から、被験者の95%が海外に行った経験があるものの、2週間以上の滞在経験者は20%しかいない。一方、日本国内にいても外国人の教員に習った経験が全員あり、また、ほぼ全員がTOEICや英検を受けた経験があることが読み取れた。

#### 4. 2 研修で学びたいことと学んだこと

研修に行く前の今回の研修で学びたいことに対する回答とそれぞれの人数、全体に占める比率は表 2-1 にまとめた通りである。研修でネイティブの英語を勉強し、自分の英語力を向上させたい被験者が最も多く、75%に達している。それに次いで、アメリカの文化、歴史とアメリカ人の考えなどを知りたい被験者とアメリカの生活を体験し、日本の生活との違いを知りたい被験者が、それぞれ60%と50%であった。そのほかには、アメリカ人の食文化、アメリカ人学生の物事の考え方や生活、職業観など、また、日米の歴史及び両国の関係について知りたい被験者もいた。

表 2-1 研修で学びたいこと

回 答	人数	比率
英語力の向上を図りたい	15名	75%
アメリカの文化、歴史とアメリカ人の考えなどを知りたい	12名	60%
アメリカの生活を体験し、日本の生活との違いを知りたい	10名	50%
アメリカ人の食文化を知りたい	4名	20%
異文化に触れ、異文化を理解し比較できるようにしたい	4名	20%
アメリカの学生について知りたい	3名	15%
アメリカと日本の歴史や両国の関係について知りたい	3名	15%
アメリカ人の日本や日本人に対する考えを知りたい	1名	5%

研修した後、研修で学んだことについての回答内容は、表 2-2 で示した。アメリカ文化、歴史、アメリカ人の生活習慣について勉強したと答えた被験者は 65% を占め、ネイティブ英語環境の中に身を置いて、自分の英語の実力が分かり、ネイティブの英語を勉強したという被験者は 60% であった。そのほかには、外国人とのコミュニケーションの取り方を学んだ、日本人とアメリカ人、日本文化とアメリカ文化の違いを知った、「教えること」の難しさと「教える側」の苦労を知ったと答えた被験者がそれぞれ 20% であった。

表 2-2 研修で学んだこと

回 答	人数	比率
アメリカ文化、歴史、アメリカ人の生活習慣などを勉強した	13名	65%
自分の英語の実力が分かり、ネイティブの英語を勉強した	12名	60%
外国人とのコミュニケーションの取り方を学んだ	4名	20%
日本人とアメリカ人、日本文化とアメリカ文化の違いを知った	4名	20%
「教えること」の難しさと「教える側」の苦労を知った	4名	20%
人との交流の大切さが分かった	2名	10%
自国文化の素晴らしさが改めて分かった	1名	5%

研修前と研修後を比較してみると、研修後、英語を勉強したという被験者は 60% で、研修前の研修で英語力の向上を図りたいという被験者を 15% ほど下回っている。短い期間で英語を上達させることは難しいと実感した学生がいたと言えるだろう。しかし、研修を通じて自分自身の英語力がどのくらいあるのかを知ることができて、今後の英語学習にもっと力を入れなくてはならないと思った学生は少なくない。また、研修で英語と文化以外に、外国人とのコミュニケーションの取り方を学び、人との交流の大切さや「教えること」の難しさと「教

える側」の苦勞を知ったなど、研修に行く前に想定していなかったことが勉強になったという事例も多く見られた。

#### 4. 3 日本語・日本文化について

研修前に研修で日本語・日本文化を教えることに関しては、「日本語・日本文化を教えること、期待すること」と「難しい日本語・日本文化には、どんなものがあるか」という二つの質問に対する回答は、それぞれ表 3-1.1 と表 3-1.2 の通りである。

表 3-1.1 日本語・日本文化を教えること、期待すること

回 答	人数	比率
日本文化を知ってもらいたい機会だと思う	13 名	65%
英語で教えることは自分にとっていい経験になると思う	5 名	25%
教えることを通して日本語・日本文化を再認識できると思う	3 名	15%
相手が日本に興味を持ってくれることを期待する	17 名	85%

表 3-1.2 難しい日本語・日本文化には、どんなものがあるか

回 答	人数	比率
敬語	7 名	35%
漢字、日本語表記	5 名	25%
あいまいな表現や婉曲な言い方	3 名	15%
「とりあえず」などの副詞や「は、に、を」などの助詞	2 名	10%
四字熟語の意味	2 名	10%
文法	1 名	5%

研修に行く前に、日本語・日本文化を教えることについては、日本文化を知ってもらいたい機会だと思う被験者は 13 名 (65%) であった。日本語・日本文化を教えることで期待していることについては、相手が日本に興味を持ってくれることを期待するのが 17 名 (85%) で最も多かった。難しい日本語・日本文化にはどのようなものがあるかについては、敬語だと答えた被験者は 7 名 (35%)、それに次いで漢字、日本語表記だというのは 5 名 (25%) であった。

研修後、「日本語を教えた時に楽しかったこと・大変だったこと」と「日本文化を教えた時に楽しかったこと・大変だったこと」は、それぞれ表 3-2.1 と表 3-2.2 の通りである。

表 3-2.1 日本語を教えた時に楽しかったこと・大変だったこと

回 答	人数	比率
学生が積極的に授業に参加し、教えたことに興味を示し、楽しそうにしてくれたことが楽しかった	12名	60%
教えた日本語を使って積極的に話しかけてくれた時は楽しかった	6名	30%
英語で日本語を教えた時、文法や意味の説明が難しいと感じた時、または英語で伝えたいことがうまく伝わらなかった時が大変だった	9名	45%
日本語表記の漢字、カタカナと平仮名を教えた時は大変だった	4名	20%
日本語を正しく発音できるように教えたのは大変だった	3名	15%
日本語と英語の違い、互いに訳すのは大変だった	2名	10%

研修で日本語を教えた時に楽しかったことは、学生が積極的に質問をしたり、質問に答えたりして授業に参加し、教えたことに興味を示し、楽しそうにしてくれたことだという被験者は12名(60%)で、教えた日本語を覚えて、それを使って積極的に話しかけてくれた時だという被験者は6名(30%)であった。日本語を教えた時に大変だったことは、英語で日本語を教えた時、文法や意味の説明が難しいと感じた時、または英語で伝えたいことがうまく伝わらなかった時だという被験者は9名(45%)、日本語表記の漢字、カタカナと平仮名を教えた時、または、その違いについての質問に答えた時は大変だったという被験者は4名(20%)であった。

日本語を教えることを経験して、「教えること」の難しさ、アメリカ人にとって日本語の発音や表記が難しいこと、及び自分自身は普段当たり前で使用している母語である日本語の知識が足りないことと英語力がまだ低いことに気づいたことが分かる。

表 3-2.2 日本文化を教えた時に楽しかったこと・大変だったこと

回 答	人数	比率
折り紙を楽しそうにやってくれた時は楽しかった	18名	90%
書道を教えて、現地の人の名前をカタカナで書いて教えてあげたりした時は楽しかった	1名	5%
日本のアニメなどで話が盛り上がった時は楽しかった	1名	5%
書道や折り紙を教えた時、英語で上手く説明できず、相手に分かってもらえなかったり、質問に答えられなかったりした時、大変だった	12名	60%
身体障害者の生徒たちに教えるのは大変だった	3名	15%
人に対する礼儀を日本人らしくしたことは大変だった	1名	5%



本研修では、折り紙と習字を日本文化の代表としてアメリカの学生に教えた。アニメの話もした。相手がそれに興味を持って楽しくしてくれたので、やり甲斐を感じて、チャンスがあればもっと多くの日本文化を外国人に紹介したいという被験者は多くいた。また、日本文化を教えることを通じて日本文化を再認識したという学生もいた。

表 3-2.2 で示しているように、折り紙を楽しそうにやってくれた時が楽しかったという被験者は 18 名 (90%) であった。日本文化を教えた時に大変だったことについては、書道や折り紙を教えた時、英語で上手く説明できず、相手に分かってもらえなかったり、質問に答えられなかったりした時だという被験者は 12 名 (60%) で半数を上回っている。

研修でアメリカ人の学生に日本語・日本文化を教えることはいい経験になったと、ほぼ全員が感じている。日本語を教えるから、外国人にとって日本語の発音が難しいと初めて分かった学生もいれば、日本語と英語の文法や構文構造が違うため、訳すのは大変だと感じた学生もいた。日本文化については、期待したとおりに、アメリカ人の学生は折り紙、書道、アニメなどの日本文化に興味を持って、楽しくやってくれた。しかし、教える側としては、英語力が不足していたり、日本文化の知識が足りなかったりしたため、思うように伝わらなかったり、聞かれたことに答えられなかったりして大変だったという被験者は多くいた。それで刺激を受けて、今後もっと英語力を向上させるように勉強しなければならないという決意を示す学生もいた。

アメリカ人に日本語と日本文化を教えることを経験して、相手が自国の言語と文化に興味を示してくれたことに喜びを覚えたことから、外の世界から日本を見ることが経験できた。今まで気づいていない日本の優れたところを発見し、自国の言語と文化を再認識することができたと言える。

#### 4. 4 アメリカ文化と日本文化、又は、アメリカ人と日本人の違いについて

研修前に調査したアメリカ文化と日本文化の違いについては表 4-1.1 の通りである。衣食住文化が違うという学生は 11 名 (55%)、アメリカは「自由の文化」であるのに対して日本は「恥の文化」、集団意識を重んじる文化であるという学生は 4 名 (20%) であった。

表 4-1.1 研修前アメリカ文化と日本文化の違いについて

回 答	人数	比率
衣食住文化が違う	11 名	55%
アメリカは自由の文化であるのに対して日本は恥の文化、集団意識を重んじる文化である	4 名	20%
アメリカ人は日本人より party が好きだ	3 名	15%
社会文化が違う	2 名	10%
アメリカはキリスト教で、日本は仏教である	1 名	5%
アメリカは多人種社会である	1 名	5%

アメリカ人と日本人の違いについては表 4-1.2 の通りである。アメリカ人は陽気でフレンドリーで、日本人は堅苦しくシャイで繊細であるという被験者は 11 名（55%）、アメリカ人は自己主張が強いが、日本人は他人の目が気になるという被験者は 6 名（30%）、日本人は礼儀正しいという被験者は 3 名（15%）であった。

表 4-1.2 研修前アメリカ人と日本人の違いについて

回 答	人数	比率
アメリカ人は陽気でフレンドリーで、日本人は堅苦しくシャイで繊細である	11 名	55%
アメリカ人は自己主張が強いが、日本人は他人の目が気になる	6 名	30%
日本人は礼儀正しい	3 名	15%
若いアメリカ人は日本人より政治に関心を持っている	1 名	5%

研修後調査したアメリカ文化と日本文化の違いについては表 4-2.1 の通りである。食生活（日本人は少量でよりヘルシーな食事をしているなど）だという被験者は 10 名（50%）、生活習慣（アメリカ人は靴を脱がないまま家に入る；商品のサイズが大きい；洗濯に対する考えが日本人と違うなど）と答えた被験者は 9 名（45%）、アメリカ人は日本人よりフレンドリーで社交的だという被験者は 6 名（30%）、交通事情（車両走行方向、免許を取れる年齢、運転の乱暴さなど）が違うという被験者は 4 名（20%）、アメリカ人は日本人より「我」が強く、個性が尊重されているという被験者は 4 名（20%）であった。

表 4-2.1 研修後アメリカ文化と日本文化の違いについて

回 答	人数	比率
食生活	10 名	50%
生活習慣	9 名	45%
アメリカ人は日本人よりフレンドリーで社交的だ	6 名	30%
交通事情	4 名	20%
アメリカ人は日本人より「我」が強く、個性が尊重されている	4 名	20%
アメリカ人は自由の価値観で、多人種をうまく受け入れる文化だ	3 名	15%
アメリカ人は日本人より宗教信仰が強い	1 名	5%
日本人はアメリカ人より協調性が高い	1 名	5%

研修後、アメリカ人と日本人の違いについては表 4-2.2 の通りである。アメリカ人は日本人よりフレンドリーで、誰にでも気軽にコミュニケーションを取れるという学生は 15 名（75%）、アメリカ人は積極的に意見を出したり、質問をしたりするという学生は 7 名（35%）であった。

表 4-2.2 研修後アメリカ人と日本人の違いについて

回 答	人数	比率
アメリカ人は日本人よりフレンドリーで、誰にでも気軽にコミュニケーションを取れる	15名	75%
アメリカ人は積極的に意見を出したり、質問をしたりする	7名	35%
日本人はアメリカ人よりちゃんとルールや時間を守る	1名	5%

研修を通して、実際にアメリカ人に触れて、アメリカ文化を体験することができた。衣食住という文化の違いが分かった学生は研修前よりだいぶ増えた。研修中ホームステイをしたため、アメリカ人の食事の内容、食事マナー、生活習慣などがより具体的に分かった上、アメリカ人の食事の内容と比べて、日本人は栄養バランスに気を使い、よりヘルシーな食事をしているという結論が出された。また、アメリカ人は日本人よりフレンドリーだという被験者は20%ほど増えた。アメリカ人は明るく、フレンドリーで、誰にでも気軽に挨拶をし、交流できることと、自己主張が強くて、積極的に意見を出したり、質問をしたりすることが分かったと思われる。それに対して、日本人は人との距離感があって、アメリカ人のような交流ができないということに気づいた。また、日本人は自己主張より集団意識の方が強いため、ルールをちゃんと守っていて、協調性が高いという認識も多少あったことが読み取れた。

## 5. まとめ

2013年度のUCR研修に参加した国際交流学科1年生20名を対象に、研修前後に調査を実施した結果から、実際にアメリカという環境に身を置いて体験したことにより、アメリカ文化やアメリカ人に対する理解がより具体的になり、深まったことは言うまでもない。日本人として普段当たり前だと考えていることについては、自分と違う考え、行動様式があるということが分かったことが明らかになった。また、日本人とアメリカ人の行動様式や日本社会とアメリカ社会を比較の視点で観察し、両者の違いを発見し、日本の良いところにも気が付いた。つまり、自国文化を再認識することもできたと思われる。研修中、現地の人と英語でコミュニケーションをとること、日本文化を教えることを体験して、外国語である英語の力はもちろん、母国語である日本語の知識が不足していることも実感し、勉学意欲を高め、また、異文化交流やコミュニケーションの重要性も理解することができたと言えよう。

今回の調査結果から、短期海外研修が大学生の外国語学習、異文化理解、コミュニケーション力向上に意識づけの観点から効果があることが分かった。一方、短期海外研修の経験を今後の大学生活でどのように生かしていくかは今後の課題である。また、短期海外研修と長期留学、及びキャリアデザインとの関連性について考察し、今後の研修カリキュラム内容を検討していく必要もあると思う。

## 【参考文献】

- 石井敏，久米昭元，岡部朗一（1996）．異文化コミュニケーション—新・国際人への条件．有斐閣
- 工藤和宏（2009）．日本の大学生に対する短期海外語学研修の教育的効果—グランデッド・セオリー・アプローチに基づく—考察．スピーチ・コミュニケーション教育 Vol22, 117-139.
- 宮澤純子，今井栄子，坂下貴子，大森直哉，星野聡子，堀井素子，飯田加奈恵（2013）．看護学生の早期体験学習（Early Exposure）としての海外研修の効果—チームワーク能力の変化を中心に—．城西国際大学紀要 22（8），23-34.